みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

暖の文化 (私のスケッチ・ブック (7))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005890

私のスケッチ・ブック(7)

暖の文化

国立民族学博物館
森　明子

◆暖房と蓄熱

人間の暖のとり方は、ところによってさまざまである。『枕草子』に、冬の朝、炭をもって廊下をわたる姿を描いたくだりがある。それが印象的で、私は、日本に古くからある暖房というと、火鉢を思い出す。

しかし正確にいうと、火鉢を暖房器具というのは間違っているらしい。暖房とは房（部屋）を温めるのであって、つまり部屋の温度を上げることを意味する。火鉢は暖をとる器具ではあるが、それは熾（おき）に身をよせて暖をとる、いってみれば焚き火と同じ原理である。むずかしい言葉を使うと、熾の輻射熱を利用するということになる。

では暖房器具はどこに、と探してみると、日本では、暖房があまり発達しなかったようだ。古い日本家屋で暖をとる装置は、囲炉裏（いろり）、火鉢、炬燵（こたつ）である。湯たんぽや、行火（あんか）、懐炉（かいろ）がこれを補った。石炭や薪、石油を燃料とするストーブは暖房器具であるが、それは大正時代に入って北海道から普及していった。

これに比べると、韓国にはオンドルがあり、ロシアにはペチカ、イギリスにはマントルピースが古くからあって、いずれも室内の気温を上げる暖房器具である。この中でマントルピース以外は、みな燃える火をすっぽり覆う器具で、熱い空気をつかまえてはなさない。マントルピースは、燃焼によって生じた熱のかなりの割合を、煙突から戸外へ逃がしてしまう。その分燃料を必要とするので、熱効率からみると、マントルピースはあまり優れた暖房器具とはいえない。

オンドルやペチカに共通するのは、蓄熱の思想である。蓄熱とは、燃焼によって生じる熱を蓄えて、燃焼が終わってからも熱を利用する工夫である。同じように蓄熱を工夫した暖房器具として、ドイツにカッヘルオーフェンKachelofenがある。以下では、カッヘルオーフェンについて述べることにする。

◆カッヘルオーフェンとは

カッヘルオーフェンは、土やレンガでつくった炉の表面にタイルを施した、据え置き式の蓄熱器である。美しいタイルを施した大型のカッヘルオーフェンには、美術的に価値の高いものもある。

燃焼の炎をすっぽり覆ってしまうことは、

図1　カッヘルオーフェンと洗濯物
ドイツ（ライプツィヒ博物館）

オンドルやペチカと同じである。燃料は薪が一般的だが、泥炭なども使われるらしい。燃焼熱は蓄えられ、やがて外側のタイルの温度をあげる。燃焼が終わってからも、蓄えられた熱はタイルを通してゆっくり輻射され、部屋の温度を暖めつづける。カッヘルオーフェンの暖房効果は、まことにゆったりとしていて、熱しすぎになることはまずない。冷えるのもゆったりしているから、タイルが冷えきってしまう前に、再び燃料を入れて燃やすと効果的である。こうしてじっくり時間をかけて温められる部屋の空気は、むらなく暖かい。

形は、半円を伏せた形、円柱状、塔のような重層構造、あるいはすっきりとした直方体などさまざまで、時代や所有者の階層、富、趣味を投影する。取付けは、居住性の高い部屋に、壁を背にして置かれるのがつねで、それには理由がある。カッヘルオーフェンには、「うしろあき炉」Hinterladerofenとか「外焚き」Ausenheizerといういい方もあって、燃料を入れる焚き口は、背後の、しかも部屋の外に設けられるのがふつうである。つまり、部屋の壁を突き抜けて部屋の外に焚き口があり、排気口も壁にぬける。

カッヘルオーフェンの歴史はひじょうに古い。その原型は、粘土製のパン焼き竈に鉢をはめこんだもので、古代ローマ時代にすでに使われていたという。カッヘルオーフェンとパン焼き竈の結びつきは、ごく最近までつづいていた。カッヘルオーフェンのタイルの意匠は高度に発達し、ゴチックの後期のころには、富裕な家の富を顕示する装飾になった。彩色タイルにレリーフを施した豪華な作品が残っていて、16世紀半ばに南チロルで作られたルネッサンス様式の作品は、タイルに施したレリーフが物語りを表現する。デザインはバロック、ロココなどの建築様式とともに変化し、19世紀には市民階級の趣味を投影して、

図2　ガストハウスのカッヘルオーフェン　オーストリア

ベルリン式Berliner Ofenと呼ばれる白タイルの質素なカッヘルオーフェンが好まれるようになる。

◆農村のカッヘルオーフェン

一方、農村のカッヘルオーフェンの多くは、緑の平らなタイルを使っている。農家の居間はシュトゥーベと呼ばれて、たいへん大きい空間である。冬、暖房するほとんど唯一の部屋で、家人がみなそこに集まって仕事をし、談笑した。カッヘルオーフェンは、暖かなシュトゥーベの象徴であったといってよい。

カッヘルオーフェンのまわりには、ベンチを置くことが多い。冬、背中を暖めながら座るのはたいへん気持ちがよいものだ。そのようなカッヘルオーフェンは、人を招く友好的な印象を与える。ガストハウス（居酒屋兼レストラン）に、カッヘルオーフェンが今も好まれるのはこのためである。それは、なつかしい居心地のよさを演出する。

家庭のカッヘルオーフェンのまわりには、ベンチのかわりに棒をわたしていることが多かった。棒は衣類をかけるためである。カッヘルオーフェンの周囲は、冬期、洗濯物を干す絶好の場所であった。オーストリアで、私が滞在していた農村では、かつてどこの農家にも、ひとつかふたつのカッヘルオーフェンがあったという。それがなくなったのは、家を

新築してからである。1970年ころから、村のどの家でも、電気や水道、セントラルヒーティングを備えた新しい家を建てるようになった。それまでは、古い家にさまざまに手を入れながら、100年くらい住んできたのである。現代的な設備や器具に対応した新しい家に移ったとき、カッヘルオーフェンが姿を消した。

農家のつくりは、だいたい一定していて、古い家のカッヘルオーフェンの置き方もおよそ決まっていた。家にはいってすぐの空間は、日本人の私たちには廊下のように見える前室で、前室と各部屋がドアで通じる。カッヘルオーフェンは部屋の中に置かれるが、前室との境の壁に背中を向けていて、前室から焚くようになっている。薪などを燃料にして燃やす場合、その燃料を入れたり灰を掃除したりするために、焚き口はどうしても汚れる。部屋の外に焚き口を設けたのは、部屋を汚さない工夫であった。

ある女性の生家では、カッヘルオーフェンの焚き口は、前室の奥の台所スペースにあったという。このカッヘルオーフェンが同時にパン焼き竈を兼ねていて、焚き口の下にパン焼き竈の口もあった。部屋に置かれたカッヘルオーフェンは、手前の部屋と奥の寝室との境目に位置していて、一つの大きなカッヘルオーフェンで二つの部屋を同時に暖めた。カッヘルオーフェンの周囲には棒を渡してあって、そこに洗濯物をかけた。当時、子どもの服は、教会用と学校用と家庭用の3着で、着替えはもっていなかった。汚れた服を夜のうちに母が洗濯し、カッヘルオーフェンにかけておく。朝になると服は乾いていたという。

現在もカッヘルオーフェンをもっている家庭はあるが、その数は減った。ただし、小学校では、現在もカッヘルオーフェンが使われ、教室のような大きな空間を暖房するのに適している。教室だけでなく、体操の授業があるときは、体育館も同様に暖房するそうだ。たしかに、冬はマイナス20℃前後に下がるこの地方では、体操のときも暖房が必要に違いない。燃料は薪である。

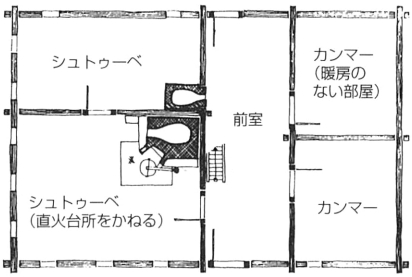

図3　18世紀前半の農家の間取り図[3)]
オーストリア

私が興味深かったのは、カッヘルオーフェンを焚く頻度である。毎日授業が終わった午後、村から委託された未亡人が翌日の授業のために焚く。翌朝6時にも学校に行って再び焚く。そうしなければ暖かさを維持できない。ただし2度焚けば、それ以上燃料を補給する必要はないという。このような焚き方は、カッヘルオーフェンの高い蓄熱能力を示している。いちど温められるとなかなか温度が下がらないが、ひとたび下がってしまったら、再び温度を上げるのにひじょうに長い時間がかかる。そこで毎日2度焚くことによって、タイルの温度を一定に保っているのである。これがもっとも効率的である。

◆手間のゆくえ

カッヘルオーフェンのもたらす暖は、その手間、空間の大きさ、かかる時間、温度の高さ、熱の質のすべてにおいて、日本人の暖とは異なっている。そのような暖を、ドイツやオーストリアの人が好んでいることに注意しよう。彼らが好んでいるのは、手軽さ、早さといった現代世界における価値と、逆行するような暖の質である。

カッヘルオーフェンは、なんといっても、燃料を燃やしてから暖かくなるまでの時間が長い。器具の大きさにもよるが、タイルが暖かくなるまでに、少なくとも40分から1時間はかかるだろう。それがやがて部屋を暖かくするまでには、さらに長い時間を要する。暖かくなったことに気づかないうちに、寒くなくなっている、というのが実際だ。熱すぎたとしても、少し温度を下げようというような芸当はできない。そのときは窓を開ければよい。これを不便と思うか、快適と思うか。

仮に、私たちが使う石油ストーブで、同じ条件の部屋を暖めようとするなら、石油をひっきりなしに燃やさなければならない。それでも部屋は暖まらないだろう。外気の温度がたいへん低く、暖めるそばから温度は下げられる。こうなると、石油ストーブは火鉢と同じように見えてくる。炎が直接あたる面だけが暖かい。カッヘルオーフェンは、機能上、必然的に、この地方の気候に適合した器具だということができる。

ただし、明日の暖のために、今日のうちに焚いておくというリズムは、機能を理解するだけで獲得できるものではない。これは、人々が自分たちの生活にカッヘルオーフェンをしっかりと取り込み、カッヘルオーフェンに合わせて自分たちの生活パターンをつくり、暖房器具に自分の身体を沿わせた行為である。こうしてつくられたリズムは、簡単にリセットできるものではない。暖は、このような生活のリズムの中におかれている。

燃料として薪が好まれることにも言及しておこう。薪は手間ひまのかかる燃料である。買えばたいへん高い。自家で手に入れるとなると、薪をつくるまでの手間は相当なものである。それに加えて保存、乾燥、運搬、掃除、といった手間もかかる。それでもみんな薪が好きだという。さらに、薪の燃料は暖かさがちがうともいう。薪でとる暖は、乾いていて心地よく持続する。

人は薪で燃やすための手間を楽しみ、その暖の質を楽しみ、暖かくなるまでのゆったりと流れる時間を楽しみ、そして均等に包み込むその暖かさにひたる。冬の長いヨーロッパで、手間ひまをかけることを厭(いと)わない人々は、そうしてつくった暖を、私たちよりもずっとよく味わい、楽しんでいるようにみえる。

こうしてみると、石油ファンヒーターのなんと便利で早くて素っ気ないことか。薪のはぜる音もにおいもないかわりに、ときどき石油のにおいを帯びた風が襲ってくる。

私は、カッヘルオーフェンがたいへん気に入っているのだけれど、これは、日本の生活にはあわないだろうと思っていることも白状しておこう。日本の冬の温度、家のつくり、部屋のスペースがそれを許さないし、そしてもっとも重要なことだが、カッヘルオーフェンが要求する生活リズムに応じるだけの余裕が、今の私たちにはない。

□参考文献

1) *Die Grosse Bertelsmann Lexikothek, Bertelsmann Lexikon,* Gütersloh, Betelsmann Lexikothek Verlag 1984.
2) 新穂栄蔵：『ストーブ博物館』北海道大学図書刊行会、1986年
3) Pöttler, Viktor H.: Führer durch das Österreichische Freilichtmuseum, Stübing, Österreichische Freilichtmuseum, 1985.

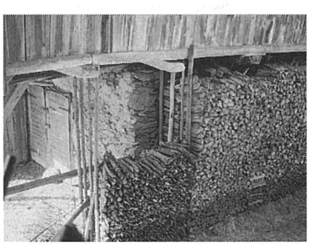

図4　農家の畜舎前に積まれた薪材　スロヴェニア